

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ④

勝利を呼ぶ黒いニワトリ

緋月 まや

フィレンツェとシエナは、なんだかちょっと、京都と奈良に似ている。ルネサンスの都として世界的な知名度を誇るフィレンツェを京都とすれば、イタリア通であればこそ知るシエナの魅力の奥深さは奈良に通じるものがある。とりわけ、ルネサンスに先駆けて十三世紀から頭角を現したシエナ派と呼ばれる画家たちの優美な画風はイタリア美術史上に名高い。教会を筆頭に、建造物もフィレンツェとはまた違う趣があり、シエナのドゥオモ(大聖堂)のきらびやかさには、いつ見ても目を奪われる。まちの中心、カンポ広場を舞台に繰り上げられる町内会対抗競馬「パリオ」は、十二世紀に起源を持つとされ、イタリアが誇る夏の風物詩である。

先日、そのシエナの知人が「フィレンツェですばらしいのは、なんといってもピステッカ(フィレンツェ風 T ボーンステーキ)だ

ね！」と言った。私には「京都ですばらしいのは、なんといってもラーメンだね！」と聞こえた。京都は全国でも有数のラーメン激戦区で、そのレベルは高いには違いないが、あまたある千年の都の文化をさしおいて、それは言い過ぎだろう。つまり、

この発言は、美術、建築をはじめとする歴史的遺産であれば、シエナだって負けはしないというフィレンツェへの挑戦状だ。これに対して、フィレンツェの知人は「確かに、シエナはとても美しいまちです。フィレンツェの次に」と、優越感たっぷりに微笑んだ。隣り合う古都であるが故に、フィレンツェとシエナにはライバル意識というものが存在する。さて、トスカーナを代表するワイン「キアンティ・クラッシコ」の世界を覗いてみれば、その競争心の始まりともいえるひとつの伝説に出会える。やはり、この国では、ワインは歴史を語るのだ。



【シエナ(左)とフィレンツェ(右)のドゥオモ】

五月下旬、心待ちにしていた「キアンティ・クラッシコ・コレクション」がフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェツァ教会で開催された。例年であれば二月、

ワイン業者、報道関係者を対象に開かれる試飲会で、アンテプリマと呼ばれる市場に出る直前のワインのお披露目の場であったのだが、新型コロナウイルスによる二回目のロックダウンの中、延期されていた。



【会場に浮かぶ「ガッロ・ネロ」】

キアンティとは、広くトスカーナ州中央部の丘陵地帯で生産されるワインの総称であるが、クラッシコはこのうち、フィレンツェからシエナにまたがるキアンティ発祥の伝統的な大地で生産されたワインを指し、その歴史は十四世紀末までさかのぼる。キアンティが親しみやすい庶民の味として愛されているとすれば、クラッシコはより品質にこだわった老舗の味として、高級感を漂わせる。キアンティワインの主要品種はサンジョヴェーゼだ。トスカーナ土着の黒葡萄で、酸味とやや強めの渋みの特徴とされる。他の品種とブレンドするにあたり、このサンジョヴェーゼを、キアンティでは最低 75%使用すればよいが、クラッシコの場合は80%以上使用しなければならない。混ぜてよい葡萄品種や熟成期間もそれぞれ異なり、クラッシコを名乗るには、より厳格な規定をクリアする必要がある。

会場には、そのキアンティ・クラッシコが四百五十ラベル、色とりどりに整列していた。壮観な眺めの真ん中で、黒いニワトリが宙に浮かんでいる。

見開いた目、突きだした胸がなんとも勇ましい。ずらりと並んだボトルの首にも、この黒いニワトリのシールが貼られている。キアンティ・クラッシコのシンボルマークで「ガッロ・ネロ(黒いおんどり)」と呼ばれる伝説のニワトリだ。

中世、フィレンツェが共和国だった頃、シエナは金融業で栄えた都市国家としてトスカーナの覇権をフィレンツェと競い、両国の間に広がるキアンティの大地をめぐる、争いは絶えることがなかった。決着をつけるにあたり、両国は一風変わった牧歌的な方法を思いついた。両国の騎士が一斉に馬を駆り、それぞれに南下、北上して出会った地点を境界と定めるのだ。出発の合図は夜明けを告げるニワトリの鳴き声だった。このため、優れた騎士よりも駿馬よりも、ニワトリ選びが重要となった。シエナ側は

白いおんどりを選び、きちんと鳴くようにたつぷりとえさを与えた。フィレンツェ側は黒いおんどりを選ぶと、小さく暗いかごに閉じ込めてろくにえさを与えず、極限状態に追い込んだ。そして決戦の日、黒いおんどりは狭苦しいかごから解放されるや否や、大きな声で鳴きだした。これを聞いたフィレンツェの騎士は、夜明けはまだ遠かったというのに、すぐさま駆けだした。一方、白いおんどりは定刻通り、空が白むのを待って鳴き、シエナの騎士は出発が遅れた。その結果、キアンティの大部分はフィレンツェ共和国の掌中に収まった。この勝利を呼ぶ黒いニワトリが、キアンティの大地のシンボルとして今によみがえったわけだ。

史実としても、ローマ教皇と神聖ローマ皇帝が対立した中世のイタリアにおいては、「グェルフィ(教皇派)」のフィレンツェと「ギベッリーニ(皇帝派)」のシエナとの間で、戦争が繰り返された。宿敵であった時代の記憶は何世紀もの時を超え、両都市にしみついている。フィレンツェとシエナの知人がいがみあうのもわかる気がする。だが、このふたつの都市のどちらがよりすばらしいかを選

ぶことはできない。平安時代と奈良時代、どちらの文化が優れているか選ぶことはできないのと同じことだ。フィレンツェとシエナは共にすばらしいのであって、切磋琢磨してきたふたつの大地の記憶が、キアンティ・クラッシコのおいしさの秘密かもしれない。



【新緑まばゆいキアンティの葡萄畑】

フィレンツェとシエナを結ぶキアンティ街道の田園風景に思いを馳せながら、まず最初に、なじみのあるワイナリー「Borgo Salcetino」の2018年をいただいた。酸味もタンニンも抑え目で軽やかな印象を受けた。これをベースに他のワイナリーのものと同様飲み比べた。ブースを構えた生産者から直接に話を聞けるのが「キアンティ・クラッシコ・コレクション」の大きな魅力だったのだが、コロナ下の今年はテーブルに着き、ソムリエに給仕してもらう形式を取ることで密集を回避していた。生産者とのつながりはオンラインになり、イベント名も正確を期せば「キアンティ・クラッシコ・コネクション」と、ネット接続(コネクション)の重要度が高まったコロナ時代風に変更され、東京を含む海外五都市での拡大開催も企画された。

よくばって、五十種近くを堪能した。うらかな晩春の昼下がりに、太陽の光が差し込む回廊でグラスに注がれるワインは薔薇色に輝いて、どれを取ってもやすらぎの香り、至福の味がした。コロナとの闘いが始まってからというもの、こんなふうに、私はどれだけキアンティ・クラッシコに癒されてきたことだろう。目を閉じれば、まぶたの裏に、キア

ンティ街道の新緑がまばゆい。家に閉じこもって三か月を過ごした昨春、一回目のロックダウン解除直後のことだ。硬く冷たいバーチャルの世界から抜け出して、人差し指ほどの赤ちゃん葡萄をこの手に取り、その匂いをかぐことができた喜びを、私は忘れない。五感で得るときめき、なにものにも代えられないその尊さを教えてくれた悠久の大地に、あの夏からずっと魅了されている。

*

イタリアのワクチン接種は、昨年末に医療関係者からスタートし、ここフィレンツェではすでに、お年寄りから若者に到るまで門戸は開かれた。感染力の強いデルタ株の新たな脅威を横に置いておくとすれば、ワクチンの効果は数字に現れ、昨秋、二万人から三万人の単位で推移していた一日当たりの新規感染者数は、六月末にはいったん千人を切った。感染状況によって「赤」「オレンジ」「黄」「白」の四地域に分類されてきたイタリアで、全州が行動規制のない「白」になった。私もこのほど一回目の接種を終えた。接種後の死亡例が報じられ、不安はあったのだが、決断を促してくれたのもこの黒いニワトリだった。「キアンティ・クラッシコ・コレクション」に参加するためには、直近のPCR検査で陰性を証明する必要があった。今後、イベントの度、鼻に綿棒を入れられるというのも面倒だ。運を天に任せて申し込んでみたところ、ファイザー製だった。気が遠くなるほど膨大な説明書に目を通し、副反応の症例を把握し、祈る思いで同意書にサインして当日に臨んだ。受けるか受けないかあれだけ悩んだのに、筋肉注射はチクリともせず、あっけなく終わった。帰り際、医療スタッフの男性に「今晚、ワインを飲んでもいいですか？」と尋ねてみた。さすがイタリアだ、予想に反して「いいですよ」と、粹な答えが返ってきた。明日も生き延びて、ワインがおいしく飲めますように。勝利の黒いニワトリにあやかっ、グラス一杯のキアンティ・クラッシコで眠りについた。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

新しいデカメロン

二宮 大輔

震災もそうだったが、コロナもやはりそうだった。2011年の東北大震災の後、震災文学というムーブメントが認められた。地震の直後、そして原発事故の直後は、扱うテーマがあまりにも大きすぎて、作家たちの筆も重かったように思うが、数年後には、いとうせいこう『想像ラジオ』が芥川賞候補に名を連ねるなど、震災とその後を描いた小説や、震災から発想を膨らませた小説がいくつも生まれた。

それと同じように、現在はコロナ文学と呼ばれるものが形成されつつあるように思う。大きな留意事項としては、コロナがまだ渦中にあるということだ。これがなかなか厄介な問題なのだ。というのは、震災をはじめ、歴史に残るその他多くの事件や災害は、突発的に発生し、それが残した影響と付き合いなかで、人々が思いを巡らせ文学を醸成してきた。ところがコロナはいつの間にか始まり、今もって長い長い発生の中にある。おそらくは明確な終わりも見極められず、ゆえに包括して振り返るような行為も難しくなるのではないだろうか。

例えば太宰治に「十二月八日」という短編がある。「昭和十六年の十二月八日には日本のまづしい家庭の主婦は、どんな一日を送ったか、ちょっと書いて置きましょう」という書き出しの通り、1941年12月8日に日本軍が真珠湾を攻撃し、太平洋戦争に突入するその日のニュースを、一般家庭の主婦がどのように受け止めたのかを、日記口調の独白で記した作品だ。発表されたのは『婦人公論』の1942年2月号で、真珠湾攻撃から数か月で太宰がこの戦争の始まりを書き留めていることがわかる。また太宰は、1946年11月ごろに、短編「トカトントン」を執筆している。1945年8月15日の終戦以降、失意に悩まされる元兵士が、有名作家の太宰治に手紙で相談するという内容だ。玉

音放送で日本が降参したことを知った主人公の兵士は、「死ぬのが本当だ」と思っていたその瞬間に、遠くで響く「トカトントン」という金づちの音を耳にして、どういう訳か思い詰めていた自分が馬鹿らしくなる。その後の人生でも、要所要所で「トカトントン」という音が聞こえ、その度に情熱を削がれ、何事をするにもやる気がなくなってしまう。

『十二月八日』も『トカトントン』も、ほぼリアルタイムで、戦争の始まりとその終わりに、人々が何を感じ取ったのかを、ありありと描写している。この二編が今もって読み継がれるのは、まさに太宰の才能と言わざるを得ないが、そもそも真珠湾攻撃と玉音放送という歴史的出来事があったからこそ成り立った作品でもある。いっぽうコロナには、先述の通り、明確な始まりも終わりもおそらくはない。いや、正確には、武漢の市場で肺炎が広まり、その原因が新型コロナウイルスによるものであると分かった瞬間が、コロナ禍の始まりと定義できる。しかし、その瞬間を書き留めておこうと思った一般家庭の主婦はいなかったし、太平洋戦争勃発時に観るような物々しさは少しもなかった。コロナ文学は明確な始まりと終わりを持たず、ゆえに完了した過去に用いる近過去ではなく、過去の状態や継続していた行為を表す半過去で描かれる文学だという気がする。

この半過去のな特徴が一因にもなって、現在、形成されつつあるコロナ文学に私はまだ納得がいていない。イタリアものでいうと、2020年4月にパオロ・ジョルダノの『コロナの時代の僕ら』が日本で刊行され話題になった。昨年この誌面でも紹介した、若きベストセラー作家ジョルダノによるエッセイ集だ。イタリアでロックダウンが始まるコロナ禍初期の様子を書き留めているが、慌てて書いた感が強く、テーマも深められていないとしつつも、未曾有の危機にいち早く反応した作家として評価させてもらった。続いて気になったのが『コロナの時代の僕ら』と時を同じくしてインターネット上で連載された『デカメロン 2020』だ。ロックダウン中のイタリアの若者に日記を書いてもらい、それを日本語に翻訳するというコンセプトで、イタリア在住のエッセイストの内田洋子氏が企画し、クラウドファンディングで費用を集め、2020年12月に無事一冊の本として翻訳出版された。こち

らはしっかり読んでいないので、はっきりした評価は差し控えるが、とにかく私はこの二作に満足がいかなかった。

その理由は私の焦りだ。個人的に 2020 年は 8 年ぶりにイタリアの地を踏むことがなく、そのことで私は焦燥感を覚えていた。経済も社会もコロナに苦しみ、多数の死者を出しているこの瞬間のイタリアを、イタリア人たちと共有できていないことが、今後の自分にとって手痛い損失になるのではないかという焦りだ。ゆえにイタリアのコロナ文学とみるなり、なんでも飛びつきたい気持ちだったのだが、先述の二作で語られている内容だけでは物足りなかったのだ。具体的にはコロナ禍でジブシーやアフリカ系移民がどうしているのかがずっと気になっているのだが、誰もそこに目を向けていない。もっとさまざまな視点で、さまざまな思いが語られるはずではないかという感想を持った。

そこにきて今年の 2 月にイタリアで刊行されたアンソロジー『新しいデカメロン』(Nuovo Decameron) は、醸成の段階が一つ進んだコロナ文学という印象を受けた。出版社は歴史あるアメリカの大手出版社ハーバースコリンのイタリア国内ライン。2015 年に成人女性向の恋愛小説で日本でも有名なハーレクインを、ハーパーコリンズが買収し、ハーパーコリンズ・イタリアとなった。ちなみに日本でもまったく同じ流れでハーパーコリンズ・ジャパンが生まれている。出版物としては国内外の大衆娯楽小説が大半を占めるなか、イタリア独自の動きとして注目すべきなのが、このアンソロジーのシリーズだ。ローマ時代の詩人オウィディウスの死後 2000 年を記念して、彼の詩集『名婦の書簡』をコンセプトに、2019 年に『新しい名婦の書簡』(Nuove Eroidi) が発表された。ギリシャ神話に登場する女性たちが恋人に手紙をつづる 21 編からなる詩集の内容を、1970 年代生まれの女性作家八人が自己流にアレンジして短編に書き直した。これが、古典の再考と、若手作家の紹介を同時に兼ねる良企画として好評を得たことで、ハーバースコリンは年一回でシリーズ化することに決定。その第二弾に選ばれた古典作品がジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン』だ。編

集部からの前書きとして「疫病とそれを食い止めるための対策に象徴された本年、この作品を選ぶのは義務と言ってもいいだろう」とコメントしている。



【Nuovo Decameron】

画像出典元: <https://www.amazon.it/Nuovo-Decameron/dp/8869059022/>

本家のデカメロンは、1348 年に流行したペストから逃れるためにフェイレンツェ郊外のフィエーゾレにやってきた男性三人、女性七人からなる貴族の若者グループが、退屈しのぎに十日間にわたり、各々小咄を披露していく。日によってテーマが決められており、十人掛ける十日間で、計百話からなる物語集だ。

これに則して『新しいデカメロン』では、三人の男性作家と七人の女性作家が、その日のテーマに合わせて、デカメロンを書き換え、十篇の短編小説に仕立てた。原作を現代風アレンジする場合もあれば、テーマに基づき新しく創作する場合もある。アンソロジーに選ばれた作家のラインナ

ップもまた素晴らしい。グラフィックデザイナーのエンツォ・マーリを父に持ち、国立ミラノ大学でイタリア文学の教鞭をとっていたミケーレ・マーリ、南部のバーリ出身で映画の脚本も手掛ける若手アントネッラ・ラツタンツィ、そしてインド系アメリカ人作家としてピューリッツァー賞を獲得し、後にイタリアに移住してイタリア語で執筆を始めたジュンパ・ラヒリなどなど。



【Febbre】

画像出典元: <https://www.amazon.it/Febbre-Jonathan-Bazzi/dp/8860446066/>

だがここでは、なかでも新進気鋭のジョナタン・バツツィに注目したい。2019年、35歳のときに発表した自伝的要素を含む小説『熱』(Febbre)で2020年ストレーガ賞のファイナリストに残った。2016年1月、一向に下がらない微熱に悩む主人公が、インターネットでHIVについて調べ始める。不治の病という過去のイメージにとらわれていた彼は、ついに検査を受けて陽性であることを確認する。現代のミラノ郊外ロツツァーノに生きるゲイのHIV陽性者の苦悩と周囲との軋轢を描いた快作だ。2016年末に自らHIV検査で陽性であるこ

とを公表し、世界エイズデーでも大きく取り上げられたバツツィが『新しいデカメロン』で描いたのは、五日目の「不幸と冒険の後に幸福にたどり着く恋人たちの話」である。こちらも現代を舞台に、ゲイを主人公に据えて、SNSやWhatsAppなどの要素を取り込んだ、アップデートされたデカメロンになっている。私の興味であるジブシーや移民とコロナの話とは離れたテーマではあるが、そのアイデアと新鮮さにコロナ文学の展望を感じたし、何よりもバツツィのような作家こそが今のイタリアを伝えてくれる頼もしい存在だと思っている。今後のイタリアのコロナ文学にも大きな期待を寄せたい。

(翻訳家、元当館語学受講生)

～会館だより～

<オンラインレッスン随時お申込み頂けます>

zoomを使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです!

・関西圏以外や外国にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方

・外出を控えられている方

受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>